

6 西庄のまな板石

「それコロだ。」 「綱をかけろ。」 コロと言うのは丸太の材木、それを石の下に敷いて綱でひっぱる。村の若者たちが、大勢でとりかかるが、なにぶん巨岩のこと容易には動かなかつた。

いまからもう五十年も前のことになる。

大正五年、村人たちが、城山長者の庭石だと言うので、城山の頂上から、険しい山路を一尺きざみに、一か月もかかって運んできたのが西庄のまな板石である。

今はそのあたりが果樹園になっているがその畑の中に白ぼくれて風化した輝石安山岩の巨大なまな板石、それがいかにもじやまになるかのようになり、ぽつんと横たわっている。そばにはご苦労した村人たちの名を刻んだ「ミカゲ石」の記念碑が立っている。なにしろその頃、数奇を好む金満家たちには、珍しい庭石などになるとずいぶん高価に売れた時代であった。それをあてこんだわけでもあるまいが、

土地の人の話では、「万一、商売にならなくても、ここまでおろしておけば結構見せ物になる。それに、この岩を中心に、このあたりを公園にでもしよう。」そんな気持ちでもあつたらしい。

ところが、労破りの宴を開いて一ぱいきげんになったのはよかつたが、どうしたことか、その翌日、その中のひとりが急に死んでしまった。「さあ大変。」格言の厚い里人の間に「城山長者のたたきだ。」というものも出てきたと言うのがこのまな板石にからまる伝説であるが、そのたたきをおそれてか、周囲が耕されてもこの石だけは動かされていない。

美しい眺めの城山の山頂、白球を追う緑の芝生、心なしか、遊閑人のゴルフ場となつてしまつたが、そこは古代の城のあとで、今も石塁の跡や城門の礎石が残っている。土地の人は、城山長者の屋敷あとだと信じているが、実は、わが国でも珍しい古代朝鮮式山城の遺構であつて、「城山長者の庭石だ。」と言つて西庄へおろしたまな板石、それは城山の城門跡にあつた礎石の一部である。

地面に埋められているときには、ちようどまな板のように見えるのでまな板石と呼ばれたが、川津からの登り道、山頂に近いところにこれと同様のまな板石が二つほど残っている。

さて、このまな板石は、自然石に加工したもので、平らかな表面は二重につくられていて、長さは約二・四メートル。幅の広いところは、八〇センチ、厚さは六・四センチばかりもある一枚の巨岩である。その根っこに、今では「史跡地」と書きたいしくいが立っている。